



## 今月のみことば 2015年10月

「また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。」(ヨハネの黙示録 13章1節)

9月に長野集会で開かれたセミナーにおいて、三十年以上も黙示録の研究に打ち込んで来られた岡山英雄先生から、難解と言われる黙示録をわかりやすく教えていただいた。

その中で、黙示録の書かれた一世紀や終末の世界のみならず、どの時代においても、二つの国がしのぎを削っている、という見方は新鮮であった。「獣の国」と「小羊の王国」である。そして、キリストを認めない国家は、必然的に《獣》としての本性をあらわしていく、と。

直接的にはローマ帝国、そして終末の一体化した世界をさす。しかし、日本においても、終戦の日まで「大日本帝国」が獣の本領を発揮し、無意味な特攻や「玉砕」という名の集団餓死を繰り返して国民の命を平然と犠牲にし、また検閲による言論封殺や特高警察による拷問などを当然のごとく行っていた事実を思い出さないわけにはいかない。

現在はどうか。国会議事堂の周辺で何万という人々が「安保法制」に異議あり、と声を挙げても、世論調査で、今国会で成立させるのは反対、と8割の人が意見を表明しても、政府は全く耳を傾けることなく数の力に任せて可決させていく。戦争を経験した人々が、切実な反対の声を挙げ、英知ある意見を述べても全く耳を貸さない、という為政者が今の日本の指導者である、という事に愕然とする。

この先に何が待っているのか。それは国民の不安を無知によるものと決めつけ、政府の言うことに従ってさえいればいい、という専横がまかり通ることなくて何であろう。世界がうらやむ至宝「憲法第九条」を骨抜きにした後には、「獣」の要求は次第にエスカレートすることであろう。

しかし、「獣の国」にやがて取って代わる「小羊の王国」がある。それはイエス・キリストを王の王、主の主とする王国であり、キリストによって罪赦され、神の子とされた人々から成り立つ国である。歴史的にはこの「小羊の王国」があつた強大なローマ帝国をくつがえし、またマッカーサー、蒋介石、矢内原忠雄など、この王国の臣下たるクリスチャンたちが戦後の日本を救った、といっても過言ではない。

やがて世界が終末に至るとき、王も奴隷も神の前に出るときが来る。その時、すでに「獣の国」は滅びている。そして一人ひとりが神の前に申し開きをしなければならない。

私たちはどちらの王国に属するものであるだろうか。

